

江戸語以降の意志表現に現れる名詞

—「つもり」以外のものについて—

土岐 留美江

一、はじめに

意志を表す表現形式として「しするつもりだ」という形がある。しかし、名詞「つもり」が、現代語のように専ら意志表現としてのみ用いられる形式名詞となるのは、江戸時代以降の比較的新しいことである。意味用法が変化するだけでなく、構文的にも文中で自由に様々な位置に現れていた江戸語以前に対し、江戸語以降は明確に、文または節の述部に現れる固定化された傾向が見られ、更に、かかる連体修飾節は意味的に「つもり」の実質的内容を表すものに限られてくるなど、モダリティ表現形式としての明確な形式名詞化が見られるのである。その詳しい成立過程や、意志のモダリティ表現の中での「つもり」の占める役割などについては拙稿一九九四「意志表現としての「つもり」の発達—モダリティ化への歴史的変遷—」で述べた。

本稿では、ほぼ同じ時期に「つもり」と類似の構文状況で意志表現に用いられる名詞には他にどのようなものがあるのか、そして、それらの名詞の性質にはどのような特徴が見られるかを調査・記述することを目的とする。また、それらの名詞類の文中での位置や形式名詞化の度合いについても、「つもり」と比較しつつ触れてみたい。

二、先行研究

佐田智明一九七四では、「つもり」や「はず」の成立・定着が「べし」や「む」などどのような関連を持つのかを通時的に考察している。その中で、意志表現としての「つもり」が江戸語におけるまで発達しなかった理由を「類縁諸形式の存在」にあるとし、次のように述べている。

「つもり」と同種の語では「気だ」がある。日本国語大辞典によると、狂言記・賞舜の例をあげる。

○我はしかとしぬまいといふきか

(一ノ五・有朋堂文庫二二二ペ)

その発生は形式名詞化の問題があつて微妙である。ほかに、目的を表わす「やうに」があるが、派生的に連用修飾節にしか用いられない。また覚悟・所存・心底などが派生的に転用されている。しかし、これらは語法的な形式まで発展せず、あるいは他の領域にとどまり、「つもり」の成立を見るに至るわけである。

しかし、この「類縁諸形式」説には疑問がある。確かに、「つもり」の意志表現と解釈出来る用例は、管見によると狂言やキリシタン資料にはまだ現れていない。しかし「気」についても同様に、『虎明本狂言』や『続狂言記』、『狂言記拾遺』、『天草版伊曾保物語』、『どちりなきりしたん』などには意志表現としての用例は一例もなく、『狂言記』についても、佐田氏のあげておられる『日本国語大辞典』の例が唯一の例である。しかもこの例は否定意志を表す助動詞「まい」を用いている例であり、この「まい」も含めた部分を、「という」で等価のものとしてうけているために、必然的に「気」にも意志としての意味が含まれているものである。このような例を、現代語の「つもり」と同様な働きを有するものと見なすことが出来るかどうかは疑問である。また、「覚悟」「所存」「心底」などの他の形式についても、「つもり」の発生以前には、派生的に意志表現として転用されている例はほとんど見られず、「つもり」の発達に先駆けて、このような類縁諸形式が意志表現としてしばしば用いられていたと言いはない。むしろ、これらが意志表現として転用されるようになるのは、後述するように「つもり」の発達の時期と並行しているのである。

ちなみに、佐田氏のあげておられる「狂言記・貫髯」の例は、『日本国語大辞典』では、

○我(われ)はしかといぬまひといふきか (傍線は土岐による。以下同様。) となっている。北原保雄・大倉浩著『狂言記の研究』(勉誠社)でも「いぬまひ」である。しかし、どちらの文脈にせよ「まい」によって表される否定意志そのものには変わりはなく、ここでの論を左右するものではない。

以上、「つもり」に先がけてその他の名詞類が意志表現に用いられていたと考えるのは疑問があることを指摘した。次に、「つもり」が意志のモダリティ形式として発達・定着していく江戸時代の、その他の名詞類について考察する。

三、対象作品及び調査方法

調査の対象及び方法は、前稿一九九四で「つもり」について考察した場合と同様である。江戸語・東京語の資料となり得るものを、様々なジャンルにわたって選び、索引のあるものについては索引を参照したが、基本的にすべての作品に二度ずつ目を通して用例をひろい出す方法をとった。

歌舞伎脚本

名歌徳三舛玉垣(一八〇一・古典大系) お染久松色読販(一八一三・同右) 東海道
四谷怪談(一八二五・岩波文庫) 小袖曾我薊色縫(一八五九・古典大系)

黄表紙

金々先生栄花夢（一七七五・古典大系）高漫齋行脚日記（一七七六・同右）見徳一
炊夢（一七八一・同右）御存商売物（一七八二・同右）江戸生艶氣樺焼（一七八五・
同右）文武二道万石通（一七八八・同右）孔子縞干時藍染（一七八九・同右）心学
早染艸（一七九〇・同右）敵討義女英（一七九五・同右）

洒落本

跣婦人伝（一七五三・古典全集）遊子方言（一七七〇・古典大系）辰巳之園（一七
七〇・同右）甲斐新話（一七七五・古典全集）軽井茶話道中粹語録（一七七九、八〇・
古典大系）卯地臭意（一七八三・同右）通言総籙（一七八七・同右）古契三娼（一
七八七・古典全集）繁千話（一七九〇・同右）傾城買四十八手（一七九〇・古典大
系）背楼昼之世界錦之裏（一七九一・同右）傾城買二筋道（一七九八・同右）

滑稽本

東海道中膝栗毛（一八〇二・岩波文庫）浮世風呂（一八〇九・古典大系）浮世床（一
八二二・古典全集）

人情本

春色梅児譽美（一八三一・古典大系）春告鳥（一八三六・古典全集）

落語口演速記

怪談牡丹燈籠（一八八四・明治文学全集）

小説

安愚樂鍋（一八七一・明治文学全集）浮雲（一八八七・新潮文庫）金色夜叉（一八
九七・日本近代文学大系）吾輩は猫である（一九〇五・岩波文庫）腕くらべ（一九
一六・日本近代文学大系）

なお、これら以外にも考察の過程で部分的に調査したものもある。

四、江戸語・東京語の意志表現に用いられる名詞・形式名詞

対象とした作品のうち、「つもり」「気」「心」または「心いき」「心底」などその複
合語）や、その他「覚悟」「料簡」など、内容を表す連体修飾節を伴って意志表現とし
て用いられている例が見られた作品のみを取り上げてまとめたのが次の表一である。

「心」については「心いき」「心底」などの複合語も含めて総数を記し、カッコ内
に複合語の用例数を示してある。

表中、区切つてある②、③、④は、前稿一九九四で「つもり」の考察の際に行った
分類に相当する。すなわち「跣婦人伝」から「名歌徳三舛玉垣」までは、一八世紀半

ばから一九世紀にかけての黄表紙及び洒落本類で、前稿の第二期にあたる。「東海道中膝栗毛」から「小袖會我薊色縫」までは、一九世紀初頭から一九世紀半ばの、文化文政期から天保期にかけての滑稽本及び人情本で、同第三期である。「安愚楽鍋」から「腕くらべ」までは、一九世紀後半から二〇世紀初頭の、明治以降の落語口演速記及び小説類で、同第四期である。

前稿一九九四では、「つもり」について意志表現以外の用例数もすべてカウントし、その中での意志用法の割合の推移についても述べたが、本稿ではその点については深く立ち入らない。後に一、二の作品を挙げて見られる傾向を指摘するにとどめる。

表一 江戸語・東京語の意志表現に現われる名詞、形式名詞

計	④										③										②										「つもり」	「氣」	「心(内、複合語)」	「その他」	
	小計	腕くら	吾輩は	金色夜	浮雲	怪談社	安愚楽	小計	小袖會	春告鳥	春色梅	四谷怪	お染久	浮世床	浮世風	膝栗毛	小計	名歌徳	傾城二	敵討義	傾城四	繁千話	心学早	古契三	総箱	江戸生	卯地異	御存商	見徳一	道中粹					高漫齊
224	148	8	68	22	14	21	15	61	3	10	13	3	1	5	6	20	15	1				2	1	1	7		1						1	1	
219	85	8	35	14	13	13	2	93	3	23	14	6	3	20	16	8	41	8	5		5	7	2	1	1	2	1	1		1	3	1	2	1	
56	11	3	1	1	1	5	24	3	8	6	2		2		3	21	7				1	3	1			1		1						2	
(17)	(7)	(2)	(0)	(0)	(1)	(4)	(3)	(0)	(0)	(0)	(0)		(2)		(1)	(7)	(0)				(1)	(2)	(1)		(0)		(0)		(0)					(0)	
79	55		25	14	3	11	2	21	5	4	2			2	5	3	3				1														

「つもり」以外に意志・意図表現に用いられる名詞のうち、「つもり」とほぼ並行して、各時期を通して、それぞれの作品にまともな用例数が見られるのが「気」と「心」である。「つもり」は、慣用句や複合語の中に現れる用法がほとんど皆無であるのに対して、「気」や「心」は、「気にかける」「気をもむ」「気をおとす」「心憎い」「心得る」「殺気」「心配り」「腹心」など、数えきれないほどの多様な慣用句や複合語としての用法があげられ、用法が極めて広い。小論で考察するものとしては、直前に意志・意図の内容を表す連体修飾節を伴って現れる場合に限っているが、まず、この「気」と「心」について、前稿一九九四では第一期にあたる、江戸語以前の考察も多少加え、意志表現としての現れ方の様相を述べたい。考察の具体的な手順としては、前稿一九九四と同様、次の二種類のものをとる。まず、形式名詞化の度合いを測る目安として、その直前に現れる語句について観察する。次に、「つもり」の場合に認められたように、文または節の述部に位置するといった構文的なパターン化が見られるかどうかを見るために、直後に現れる語句を観察する。

四、一、「気」と「心」

四、一、一、江戸語以前

「気」

まず、「気」がその直前に意志・意図の内容となる語句を伴って意志表現として現れ始める時期についてであるが、先行研究のところでも指摘したように、上方の狂言台本やキリシタン資料では、管見による限り、意志表現としての「気」はほとんど見られず、可能性のあるものとしては、唯一、『狂言記』の次の例があるだけである。

○我はしかといぬまいといふきか

(『狂言記の研究』勉誠社)

しかし、これも助動詞「まい」を用いている例であり、動詞類を直接に受ける現代語の「つもり」の持つ意志表現機能と同レベルに考えるには問題がある例であることは先に述べた。

そこで、その後のものについて、第一期のものにあたる近松の浄瑠璃『夕霧阿波鳴渡』を一例として索引を利用して調べてみると、「気」の用例は次の八例である。

「気」が単独で用いられているもの(3例)

○ア、気がさつぱりと成りました、(四四〇)

○氣の通つた女房はござんすまいがとわらはるれば、(五六二)

○家内がいさむきほひにつれて諸病はきよりほんぶくの、(九五二)

「気に入る」「気がすむ」「気がつく」などの慣用的表現で用いられているもの(5例)

○ふうふの衆が念此に逢葉と迄氣がつけ共、(二三七)
○皆に氣を付られてはやもや〜とはらが立、(四三三)
○おはらひのねり衆御番がはりの人のきに入やとはれて、(四八四)
○おくさまにも少おきのすまぬことあれ共、(五一五)
○左近ふうふはきもつかずサア喜左衛門、(六〇七)
具体的内容に相当する連体修飾節を伴って意志表現として用いられている例は一例もない。このような状況から見て、「つもり」が意志・意図表現として定着していなかった江戸語以前には、「氣」も、意志・意図表現としてしばしば用いられることはなかったと言えよう。

「心」

「氣」と同様に、「心」についても、上方の浮世草子以前の狂言台本やキリシタン資料などでは、管見による限り、直前に内容を表す語句を伴って意志・意図表現として用いられている例は見られない。

しかし、その後のものについて、「氣」と同様に、近松の浄瑠璃『夕霧阿波鳴渡』を見てみると、「心」は全部で二〇例見られるが、そのうち意志・意図の意で、内容にあたる連体修飾節を伴って用いられている例が、次の一例だけ見られる。

○命の内_レにちよつときて伊左衛門さまにあふ心、(七二二)
それ以外に、意志表現ではないが、上接語に修飾語を伴って現れる例が、次の七例である。

○歌の心_レよ井籠のゆ気の大きね、(六一)
○先正月の心_レ三ばうかざつてもつておじやとて入れれば、(二二二)
○はいく〜と親の心_レもしらあはかませ、(四〇六)
○あの子が心_レは此雪をうみの母と思ふてゐる、(四一七)
○と、様のお心_レがさこそと推量せらるゝと、(六〇三)
○さすが女房のやさしくも夕霧が心_レをあはれみ、(六五九)
○りんじうの心_レがたんのふさせたいはやふあふてくだされ、(八六三)
また、修飾語を伴わずに、「心」が単独で用いられている例が、次の二二例である。

○つとめも心_レまゝなれど、(四二)
○そうかの様なけいせいめにみじんも心_レは残らね共、(一五七)
○あひたや見たやと心_レもせき、そむけてむかふ客のかほ、(一八一)
○わしが心_レかはつたらふんで計をかんすかた、いて計をかんすか、(二五四)

- うら山しうは思わぬと心^レの底をくどきたて、(三二九)
- そなたを手本にお心^レがをさまつてお嬉しさ、(五一六)
- 心^レも至り目はづかしい、(五五六)
- 心^レみだれて慮外の段御免遊ばし、(六二五)
- とつくより聞付無念共口おし共心^レ一つにたへかねしが、(六五二)
- 心^レはさしもちがふかや、(七〇〇)
- 心^レをむねにつみた、むふとんの上にかつはとふし、(八〇四)
- 心^レりはつで道中よふて、(八四一)

江戸語に先駆けて、やや以前の上方の作品では、ごく少数ではあるが、意志表現として用いられる、「つもり」に類似した用法の「心」が、一部に現れ始めていたようである。しかし、一つの作品中に現れる「心」の全用例を一覧してみると、連体修飾語を伴わない単独の名詞として用いられているものが大部分である。そして、連体修飾語を伴う場合でも、その「心」の「持ち主である人」を明示する(「と、様のお心」「夕霧が心」など)ものが多く、「心」をある特定の方向の「考え」(モダリティ)を表現するものとして位置付け、形式名詞化させると共に具体的内容を連体修飾語で補充させるといった、モダリティ表現形式としての様相は全く見られないことがわかる。この時期の「つもり」に類似する用法の「心」は、「心」全体の用例の中では非常に周辺のな例である。前稿一九九四で述べた、同時期の「つもり」の意志用法の萌芽の状況と比較しても、仮に意志表現への移行を前提として表現するならば、ずっと「遅れた」状況にある。もちろん、意志表現として確立した後の時代の「つもり」と比較するならば、質・量ともに全く比較にならない程の微々たるものであり、「類縁諸形式」として次の時代まで「つもり」の台頭を押さえていたという程の勢力は持っていないなかったのである。

四、一、二、江戸語・東京語における意志表現としての「気」と「心」

まず、表一から全体の用例数について述べると、「気」については、第二期は四一例、第三期は九三例、第四期は八五例である。同時期の「つもり」は、それぞれ一五例、六一例、一四八例と、特に明治以降に急激に用例数が増えているのに対し、「気」は、明治以降はむしろやや減少気味である。「心」については、「つもり」はもちろん、「気」と比較しても、各時期を通しての意志表現としての全用例数はずっと少ない。「心」がそのままの形で現れるものが三九例、「心いき」「下心」などの複合語を合わせても五六例である。そして時期別に見ると、明治以降の第四期には、用例数が半分程度に

まで減少している。このことは、近代以降、意志・意図表現として用いられる名詞が、「つもり」に集中してくることを示している。「心」は、意志表現としての例が、江戸語以前にもわずかながら見られ、比較的早い時期から意志・意図の用法が行われていたと思われるにもかかわらず、そのような用例は時代が下っても増加しない。むしろ、「つもり」の勢力に押されて減少しながらも、消えてしまうこともなく、ごく少数ずつ、意志・意図用法は明治以降にまでうけつがれていく。

四、一、二、一、直前に現れる語

「気」と「心」について、その直前に現れる語をまとめたのが、次の表二である。

表一と同様、「心」については「心の複合語」も含めた総数である。カッコ内に複合語の用例数を示してある。

「心の複合語」の内訳は次の通りである。

第一期↓「心いき」4 「心ざし」1 「下タ心」1 「悪心」1 (計7例)

第二期↓「心いき」3 (計3例)

第三期↓「下心」4 「心得」1 「心組」1 「心底」1 (計7例)

「ぬ」には「ん(否定)」、「ない」には「ねえ(否定)」をそれぞれ1例含む。また「たい」1例は「てえ」の形である。

第二期「動詞+」の「」の二例は、次のものである。

○梅里はお熊が情を含みて心深き言葉に、いよいよどむの心_レを発し(春告鳥)

○今から直に女房にもつてお呉の心_レなら(春告鳥)

また、第三期「」との「」の用例は次のようなものである。

○唯飯島の別荘のお嬢の様子を垣の外からなりとも見ませうとの心_レ組で御座い升から、(怪談社)

○源次郎を忍ませやうとの下心_レで、(同右)

○飯島二人の命を断たんとの汝の心底_レ、(同右)

表二 「気」と「心」の直前に現われる語

計	「気」				「心(複合語)」			
	二期	三期	四期	合計	二期	三期	四期	合計
①動詞系								
動詞								
動詞+「の」	33				11(1)	14(1)	2(1)	
一人(意志)					1(1)	1(0)	1(0)	
一べき(シ)					1(1)	1(0)	1(0)	
一せる	1					1(0)		
一ている								
一ておく		1	2	1				
一てくれる		3	3	3				
一ぬ(否定)					2(0)	1(0)		
一ない(シ)								
一たい	1							
②形容動詞								
③名詞系								
名詞+「の」	1				1(0)	1(0)		
名詞+「が」		3		3	2(1)	1(1)		
④指示詞					1(1)	1(1)		
こんな		1	1				1(0)	
そんな								
その		1	9	1	1(1)	1(0)		
そのような								
⑤「〜という」系								
〜という		4			1(1)	1(1)	4(3)	
〜という	1	1	1					
〜という		2						
〜との			6				3(3)	
計	41	93	85		21(7)	24(3)	11(7)	

「気」

各時期を通して、動詞がそれぞれ四一例中三三例、九三例中五六例、八五例中四九例と、やはり最も多いものの、それ以外の形式も早くから様々なものが見られる。江戸語・東京語においては、「気」は早くから多様な形式を内容としてうけて、意志・意図表現としてしばしば用いられてきた。

また、表一や本章での分析の際には数に入れなかったが、やはり意志や意図の意味を表している次のような例もいくつか見られる。

○短八 其くせ、己が気ではいつばし能書の心いきで、 (浮世床)

○跡にては、不便なことをせしこと、おもはるゝのをたのしみにと哀れなる気を引出すも、恋ゆゑ狂気にひとしき所為なるか。 (春告鳥)

これらは、直前の「己が(うぬが)」、「哀れなる」などが、「気」の内容とはなっておらず、「気」が独立性を保ったままで、意志や意図を表している。もし、このような例を分類に加えるとするれば、これらは「そのまま(単独で)用いられるもの」となる。

また、「氣」が、名詞＋「の」、形容詞、形容動詞、文の一部などの、何らかの上接する修飾語を伴っている場合をひろい出してみると、調査対象とした第二期から第四期までの江戸語・東京語の資料では、そのような例は全部で二八九例あるが、そのうち、上接する修飾語が、「氣」に対して意志・意図の内容という関係になっているものは、二二二例である。四分の一近くの用例は、意志・意図とは関係ない文脈で直前に来る語をうけている。

このように、「氣」は名詞としての独立性も高く、各時期にかかわらず直前の位置には様々なものが来る。

意志・意図表現以外にも、先に述べたように、「氣」は「氣になる」「氣をもむ」「氣をおとす」など、単独で慣用句中に用いられることも多く、「つもり」よりずっと豊かな用法上のバリエーションを持っている。一例として『吾輩は猫である』について見てみると、索引によれば、「氣」は二〇三例現れる。そのうち、意志・意図表現として内容を伴って用いられている「氣」は、表一でも示したように三五例だけである。内容を伴って、形式名詞的に意志・意図表現として用いられるのは、「氣」の多彩な用法の中のごく一部に過ぎないのである。「氣」は、明治末期の『吾輩は猫である』をとって見ても、意志表現としての形式名詞化はほとんど見られず、実名詞として意志表現以外の場面で用いられることが多い。

「心」

「心」は、用例の絶対数が「つもり」と比較してかなり少ないため、直前に現れる語の分類でも数字から有意な傾向を見いだすことは難しい。

しかし、「氣」と同様に、表一や本章での分析の際には数に入れなかったが、「心」が、内容を伴わずに、それ自身で文脈的に意志・意図を表す次のような例もいくつか見られる。

○このおるらんが心は、古主を米八にみつがせんとおもふ、義理となさけのこんたんにて、
(春色梅)

また、「心」と内容の間に他の語がはさまり、内容となる上接語が直接にかかっていない次のような例も見られる。

○(米八) かんしやくといふも近ごろおしつけどが、命も捨る私がころ。
(春色梅)

このような例も分類に入れるとすれば、「氣」の場合と同様、「そのまま用いられるもの」となる例である。これらを見ると、やはり「心」も構文的な独立性が高く、実

名詞としての性格が強いと言えよう。

調査対象とした作品の中で、「心（心の複合語）」が、名詞十「の」、形容詞、形容動詞、文の一部などの、何らかの修飾語を伴っている例をひろい出してみると、そのような例は全部で一六三例（内、複合語七八例）あるが、そのうち、意志・意図表現として現れているものは五六例（内、複合語一七例）に過ぎない。その、意志以外のものの中には、なぞときの「答え（わけ）」や、「意味」などの意として用いられるような例もしばしば見られる。

○（弥次）犬ころが拾正ととく。その心は、ぶた二ながらきやんとをもの、

（膝栗毛）

○（北八）アノ梯子ばかりよこした心は、のぼつてこいといふこゝろいきでござりやせう。

（同右）

○（なままゝい）ナゼ赤切が手ひかず膏だ

（ばんとう）ハイ、手をひかぬ間に治るといふ心でござります

（浮世風）

このような用法も、「つもり」や「気」には見られないものであり、「心」が非常に幅広い用法を持ちながら現代にまで至っていることを示す一例である。

また、「心」の用例全体の中の、意志・意図用法の割合について、「気」の場合と同様に、一例として『吾輩は猫である』をとりあげてみると、「心」の用例は五三例見られる。しかし、その中で意志・意図を表すと思われる例は、次の一例だけである。

○競争の念、勝とう勝とうの心は彼らが日常の談笑ちゅうにもちらちらとほのめいて、

（吾輩は）

しかしこれも、連体修飾節中に意志の助動詞「う」が含まれているため、必然的にそれを受ける「心」にも意志の意味が加わっていると思われるものであり、形式名詞を用いた意志表現の例として扱うには問題がある例である。

また、「気をおとす」などの慣用的表現の多い「気」に対して、「心」は、「心ざし」「心組」「下心」などの複合語の種類が非常に多いのが特徴であった。それらの複合語は、「心」と比較してプラスアルファのニュアンスが加わるものの、やはり文脈によって意志・意図の意味を表すことが出来る。しかし、それらを、モダリティ表現としてその名詞に備わった固有の用法と考えるには無理があり、「心」やその複合語の持つ概念が非常に幅広いために、助動詞「う」などを含んだ意志を表す連体修飾節をうけることも出来る、という程度のものである。そして、それらの連体修飾節によって表される意志・意図の意味が、結果的に文脈としてそれらの名詞にも付け加わったものと見なすべきであろう。

四、一、二、二、直後に現れる語

「気」と「心」について、その直後に現れる語をまとめたものが、次の表三である。「気」については、次のようなものも含まれている。

- a. 助動詞「だ」 ↓ 「である」「でござんす」(第二期)。「だろう」「だから」「だ
い」「である」「なら」「なのだ」「なの」(第三期)。
- c. 終助詞「か」 ↓ 「かえ」(第二、三期)。「かエ」「かい」「かもしれない」(第四
期)。

- e. 格助詞「に」 ↓ 「に相違ない」(一例のみ。第四期)。
- f. 係助詞「は」 ↓ 「あ」(一例のみ。第二期)。

「心」については、表一、二と同様、「心の複合語」も含めた総数であり、カッコ内に「複合語」の用例数を示してある。

表三 「気」と「心」の直前に現われる語

	「気」				「心(複合語)」			
	二期	三期	四期	小計	二期	三期	四期	小計
①文または節の述部に位置する場合								
a. 断定の助動詞「なり」	2			2				
「じゃ」								
「だ」		41		41				
「です」			33	33			3	3
b. 接続助詞「でも」								
c. 終助詞「か」	6	1	1	8	1	2	1	4
「よ」		2		2				
「さ」	2			2	3			3
小計	23	54	41	118	10	10	4	24
②その他								
d. 中止法								
e. 格助詞「と」(引用)	4	1	25	30	1	3	1	5
「に」		17		17	0	0		0
「の」					1	1	1	3
「を」					1	1	1	3
「から」					1	0	0	1
f. 係助詞「は」	7	2		9	3	0	0	3
「が」	3			3	1	0	0	1
「も」	4	15		19	1	1	1	3
「あり」					1	0	0	1
h. 形容詞「なし」					2	1		3
小計	18	39	44	101	11	14	7	32
計	41	93	85	219	21	24	11	56

まず、「氣」について直後に現れる語句を見ると、「①文または節の述部に位置する場合」は、第二期で四一例中二三例、第三期で九三例中五四例、第四期で八五例中四一例であり、時期を問わず、おおよそ意志表現として用いられる用例の半数程度である。「つもり」のように、そのほとんどが文または節の述部に現れるようになるといった、明らかなパターン化は見られない。意志表現として用いられる例に限ってみても、「氣」は明治以降に至るまで文中の様々な位置に現れる。

「心」については、やはり「氣」と同様、時期を問わず様々なものが下接しており、特に文末表現に多く現れるという傾向は見られないようである。「①文または節の述部に位置する場合」は、複合語とも合わせて、第二期で二一例中一〇例、同様に第三期で二四例中一〇例、第四期で一一例中四例と、各時期を通して半数にも満たない。「氣」や「心」は、意志表現として現れる場合、「つもり」のような明らかな構文的パターン化は見られず、文脈によって意志・意図を表す場合もあるという程度のものである。

四、二、「氣」「心」以外の名詞

先に、表一では「その他」として総数のみを示したが、「氣」「心」以外に、具体的内容に相当する連体修飾節を伴って、意志表現に近い文脈の中で現れた名詞類の内訳を示したものが次の表四である。

「氣」や「心」と同様に、次の例のように単独で用いられるものや、

○(小ひな 実正に門徒だと私きやア)簡があるヨ (春告鳥)

○(八木独仙)いくら自分がえらくても世の中はどうてい意のごとくなるものではない、落日をめぐらすことも、加茂川をさかに流すこともできない。(吾輩は)

修飾語がその名詞の内容となっていない次のような例や、

○(ぐち里)こつちのりやうけんの通りにするまでは、ぶしつけが有ちや、わるふおさんす。(錦之裏)

○依頼どおりにしてやりたくなる。主人をいかすのも殺すのも鈴木くんの意のままである。(吾輩は)

意志・意図とは離れた文脈で用いられている次のような例は除いてある。「意味」

○(孔蕪)扱又鶴沢と置いて、蟻鳳と対をとつた心はどういう意であろうナ。(浮世床)「氣持ち」

○ひとりでかってに苦心しているのじゃないかと主人は毫も感謝の意を表さない

「好意」

(吾輩は)

○(鈴木)それをほくがわざわざ出張するくらい両親が気をもんでいるのは本人が寒月くんに意があるからのことじゃあないか。

(吾輩は)

全体数が少ないので、一つの語形について用例数をまとめて示すのではなく、テキストにした本に従って表記をそのままあげ、視覚的に把握できるように並べてみた。作品名は成立年代順に並べ、基本的に、各作品を通して頻繁に見られる名詞を上段に、あまり見られない名詞を下段に配したが、多少前後している所もある。

『浮世床』の「空」、『浮世風呂』の「利屈」の用例と、『吾輩は』の「予算」の例はそれぞれ次のようなものである。

○(お山) 常住取替引替見立直しの女房を持人は気がねへのう

(お川) 第一居る空がねへはな。

(浮世床)

(テキスト頭注、「落ちついて居る気にならない。」)

○(作) ソレ、和睦の濟だ上には、盃の跡で証文はおれが貰つて、目下で引裂て終うと云利屈だから、ソレ、わかりきつて居やうぢやアねへか

(浮世風呂)

○(善沙迹) たまさか妻君のよろこぶ笑顔を見てたのしもうという予算も、がらりとはずれそうになつてくる。

(吾輩は)

『浮雲』の「意」については、この例にはふりがなが付いていなかったが、別のところで出てくる「意」の五例には、すべて「こころ」というふりがながあったので、おそらく、この例も「こころ」と読むものと思われる。

また、『吾輩は』の「予見」の例には、「りょうけん」とふりがなが付されていた。

表四 「気」・「心」以外の名詞

江戸生	「かくこ」1	「はら」1	「意」(こころ)「」1
繁干路			
錦之裏			
傾城二	「かくこ」1		
膝栗毛	「了蘭」1		
浮世風	「かくこ」1	「はら」2	
浮世味	「了蘭」1	「はら」1	「利屈」1
春色梅	「覚悟」2		「空」1
春告鳥	「覚悟」1		
小袖會	「覚悟」5	「了蘭」3	「こんたん」1
安愚楽		「了蘭」1	
		「りやうけん」1	
怪談社	「覚悟」2	「了蘭」4	
		「りやうけん」1	
浮世			「意」(こころ)「」1
金色夜	「覚悟」5		「志」1
			「意」2
			「底意」1
			「意」1
			「意」3
			「意」(こころ)「」1
			「悪工み」(わるたくみ)「」1
			「悪計み」(わるたくみ)「」2
			「胸算用」1
			「精神」6
			「考え」2
			「大気炎」1
			「予算」1
吾輩は	「かくこ」1	「量見」2	
		「了見」9	
		「予見(りやうけん)」1	
			「意」(こころ)「」2
			「意」(こころ)「」1
			「工み(たくみ)「」1
			「悪工み(わるたくみ)「」1
			「悪計み(わるたくみ)「」2
			「胸算用」1
			「精神」6
			「考え」2
			「大気炎」1
			「予算」1

表四を参考に、まず、これらの名詞の持つ共通の性格について考えたい。前稿一九四で、「つもり」の意志用法の萌芽期である第一期の上方の浮世草子類では、意志を表すと思われる「つもり」の中にも、意味的に、金銭がらみの「計算」、現代語とほぼ同様の「意図」という二つのタイプのものがあり、それらをはっきりと線引きすることは難しい面があることを指摘した。表四に見られる名詞類について、いくつかの類型を考えるとすれば、この二つのタイプのどちらか一方のみの性質(すなわち「計算」か「意図」か)を持ったものと、特に方向を限らず漠然と精神活動を表す広い意味のものとの三種類にほぼすべておさまる。具体的には、「もくさん」「(わる)たくみ」「胸算用」「予算」が「計算」系であり、「かくこ」「はら」「意」など、「」を決める(決する)という表現が可能な、決意を表すものが「意図」系であり、「りやうけん」「精神」「考え」などが「漠然」系である。先に述べてきた「気」や「心」も考え併せるならば、「漠然」系に含まれることになる。

以上のことから、「つもり」以外の名詞が意志表現に用いられるための条件としては、その名詞が、意味的に、

- 一、特定の方向にかぎらず広く精神活動を表すものであること
 - 二、「意志」に類するものか、「計算」に類するものであること
- の二つのうちどちらかを満たす場合ということになる。

一の条件を満たすものは、直前に動詞の言い切りの形や、意志の助動詞「う」など

を含む連体修飾節を受けるとき、その内容が文脈としてそれぞれの名詞に付け加わるのを拒否しないタイプのものである。もともとの意味が幅広く、ほぼ無色なため、連体修飾節の表す意志・意図のニュアンスをそのまま受けることが出来るのである。しかし、それが「つもり」のように用法的に確立され、構文的にも一定のパターンとして固まっているとは言えないことは、先に「気」や「心」について考察した際に述べた通りである。

一二の条件を満たすものは、基本的に「つもり」が意志表現以前に持っていたもともとの性質と類似の性質を持つものである。そのうち「意志」に類するものは、意志表現として用いるには最も適している。しかし、連体修飾節との結び付きという点では、やはり非常に弱いものである。例えば「意」について、文化文政期の江戸語の代表的な作品である『浮世風呂』を例にとって見ると、次のように具体的内容を伴わずに「意」だけで実質名詞として現れる例がほとんどである。

○(鬼角) わざとごぢ付た地口を書くが戯作本の意とする所。

(浮世風呂)

○(地) 狂言綺語の戯れも、三編すでに御意に協ひ、是非四編目の御望に、ヲツト、まかせの早合点。

(浮世風呂)

また、「計算」に類するものは、未来の計画という意味で用いられる場合に限り、意志表現と類似の内容を表すことになるもので、連体修飾節の内容が、未来の行動に関するものでない場合には、当然、意味的に意志とは接点を持たないことになる。

次に、現れる名詞の時代的な推移について言えば、古くから見られるのは「かくご」と「りょうけん」と「はら」である。このうち、「かくご」は、現代語においてもしばしば直前にその内容を表す語句を伴って用いられ、江戸語・東京語において、このようなパターンで用いられる名詞のうち、最も頻繁に見られるものである。それに対して「はら」は、文化・文政期頃までは用例が見られるが、それ以降はあまり見られなくなる。また、「かくご」と並んで明治末頃までしばしば用いられているのが「りょうけん」である。しかし、現代東京語では、意志表現としてこのようなパターンで用いられる「りょうけん」は、あまり目(耳)にしないように思われる。

「りょうけん」の漢字表記は、明治初期あたりまではすべて「了簡」である。ところが、明治末頃の『吾輩は猫である』では、三通りの異なった漢字が当てられている。漱石の個人的な書きぐせによるものか、あるいは文学的な効果をねらった当て字であろうか。ちなみに、現代語では、「了見」「料簡」「了簡」など、慣習として様々な表記が通用している。

また、「意(い)」「や」「意志(いし)」が、このような構文で現れるようになるのはずっ

と新しく、明治中頃の『浮雲』以降である。それ以前には、先に挙げた『浮世風呂』の例のように、連体修飾節を伴わずに単独で用いられるのみであった。同様に「考え」が用いられるのも、明治末の『吾輩は猫である』が最初である。現代語の「考え」は、特に形式ばった言葉でもなく、ごく日常的に多用されているが、文献の上で意志表現のパターンの中で現れ始めるのは、かなり新しいことなのである。

五、まとめ

以上、江戸から明治以降にかけて、「つもり」以外に意志表現に現れる名詞の種類及び特徴について述べた。

用例の大部分をしめる「気」と「心」について、「つもり」の発達以前には、これらも意志表現としてしばしば用いられることはなかったことを確認し、また、時期が下っても「つもり」のように形式名詞化が進まず、意志用法が一つの用法として固定化されたわけではないことも指摘した。

「気」「心」以外には「かく」「りようけん」「はら」「意」「こんたん」「たくみ」などが見られたが、「気」や「心」と合わせてこれら意志表現として用いられる名詞の性質としては、次の二つのタイプに分けられることが明らかになった。

一、精神活動を表す名詞の中で特定の方向に限らず幅広い意味を表すもの

二、「意志」か「計算」かどちらかに非常に近い意味を持つもの

連体修飾用語を伴って意志表現として現れる名詞の大部分が一のタイプのものであった。二のタイプのものについては、意志表現として固まる前の「つもり」の意味特徴のうち、一つの側面だけを共有しているものである。

また、見られる名詞の種類にも時代的な移り変わりがある。江戸語では「覚悟」「了簡」「はら」などが主なものであり、明治期には「はら」はあまり見られなくなり、新しく「意(志)」「精神」「考え」などが加わってくる。このことは、単に意志表現という一つの意味領域の中での変遷と言うより、もっと広く精神活動を表す名詞語彙の変遷を反映したのと言えるかも知れない。

このように、「つもり」以外に意志表現に現れる名詞は、「つもり」に意味的に非常に近いもの(「意志」など)か、概念が幅広く、意志に限らずあらゆる文脈に現れることができるもの(「気」「心」「考え」など)であることが明らかになり、加えて、現代語でしばしば用いられる「考え」などは、意志表現としては非常に新しいものであることが明らかになると、逆に「つもり」の特異性がより際立ってくる。前稿一九四で述べた、「つもり」の意志表現としてのほぼ完全な固定化(形式名詞化とそれ

に伴う構文的パターンの確立)は、それ以外の名詞には見られない特徴である。現代語では「しするつもりだ」「しする気だ」「しする考えだ」などは類似の表現として括られるが、それぞれの名詞のモダリティ度(形式名詞化の度合い及び連体修飾節への依存度)は「つもり」と「それ以外の名詞」でかなり異なっているのである。

／参考文献／

益岡隆志一九九一『モダリティの文法』くろしお出版

仁田義雄一九九一『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房

森山卓郎一九九〇「意志のモダリティについて」(『阪大日本語研究2』)

中村通夫一九四八『東京語の性格』川田書房

金田一春彦一九五三「不変化助動詞の本質(上)、(下)」

(『国語・国文』第二二、二三卷)

田中章夫一九六五「近代語成立過程に見られるいわゆる分析的傾向について」

(『近代語研究第一集』武蔵野書院)

同右 一九六九「近代東京語の当為表現」

(『佐伯梅友博士 古希記念国語学論集』表現社)

同右 一九七七「近代語における複合辞的表現の発達」

(『松村明教授還暦記念 国語学と国語史』明治書院)

佐田智明一九七四「はず」と「つもり」(『北九州大学文学部紀要 第一〇号』)

土岐留美江一九九四「意志表現としての「つもり」の発達—モダリティ化への歴史的

変遷—」(『都大論究 第三十一号』)

(とき るみえ・東京都立大学大学院生)